怪談劇

岡本綺堂

青空文庫

江戸時代の怪談劇は、大抵六、七、八の三月のあいだを択んで上場されたようである。つまり夏狂言とか盆替りとか云う場合に、怪談物を選択したらしい。暑い時節に怪談をみせて、夏なお寒きを覚えしめるという趣向かも知れない。

勿論、怪談の狂言に時代物もあるが、怪談として凄味の多いのは世話物である。その意味から云って、世話物は舞台の装置も人物の扮装もアッサリしていて暑苦しくない。それがまず第一に夏向きである。第二には、暑中の観客はとかくに茹り易い。その茹り気分を強く刺戟するには怪談などがお誂え向きである。それらの事情から、自然に怪談が択まれる事になったのであろうと思われる。

南北は怪談作者のように云われ、私もそう思っていたのであるが、かの大南北全集を通読すると、真の怪談劇と認むべきものは甚だ少ない。例の「四谷怪談」でお岩と小平を見せ、「彩入御伽草」で小平次と皿屋敷を見せ、「成田利剣」で累を見せているくらいで、他は真の怪談劇と云うべき物では無いようである。黙阿弥にも「小幡小平次」以外には、怪談劇らしい物は無い。明治になってから「箱根鹿笛」を書いているが、これはむしろ怪談否定劇である。

明治以後に出来た怪談劇では、円朝の話を脚色した「怪異談牡丹燈籠」が最も知られている。それから、同じ円朝物の「真景累ヶ淵」が近来有名になった。しかし大体に於いて怪談劇に余り面白いものは少ない。その大関とも云うべき「四谷怪談」とても、昔は知らず、今日の観客

はむしろ伊右衛門や直助権兵衛の方に多分の興味を感じて、肝腎のお岩さまの方は二の次にされている傾きがある。

小山内薫氏が曾て云われた通り、怪談は所詮「怪談」で、ストーリーの領分に属するものらしい。劇として怪談の凄味を見せようとするのは、昔でもなかなかむずかしく、殊に現代の舞台の上では猶更むずかしそうである。いかに照明などを巧みに利用しても、あまり良い効果を得られそうもない。私も何か新しい怪談劇を書いてみたいと心がけているが、どうも巧く行かない。その小手調べとして、去年の夏は本郷座に「牡丹燈記」を上演し、今年の春は歌舞伎座に「雷火」を上演してみたが、どちらも舞台の上ではやはり成功しなかった。

在来の怪談劇の狙い所は、事件そのものの怪奇と云うことよりも、早替りとか仕掛け物とかいう一種のケレンにあったらしい。俳優もそれを得意とし、観客も亦それを喜んだらしいが、そう云うケレンが最早喜ばれないとすると、今後の怪談劇はよほどむずかしい事になる。鈴木泉三郎君の「生きている小平次」などは、近時発表された怪談劇の尤(ゆう)なるものであるが、最後に小平次の姿を見せた方が好いか悪いかは種々の議論のある処で、あの合理不合理とを別問題として、私は今も猶どちらが好いかの判断に迷っている。

いずれにしても、在来の怪談劇が現代の舞台の上からだんだんに消えてゆくのは判り切っている。そうして、それに代るべき新しい怪談劇が出現するかどうかと云うに、いかに文明が進歩しても、怪を好む人情の消え去らない以上、なんらかの形式に於いて怪談劇は依然繰り返さ

れることであろう。しかも優れたる怪談劇は容易に出現しないであろう。

前にも云う通り、在来の怪談劇は早替りとか仕掛けとか云うことを主としている。それは勿論俳優本位から考え出されたものであるが、一般の観客も亦、幽霊その物の姿を見なければ得心しなかったらしい。演劇にかぎらず、在来の小説などに描かれている幽霊も、大抵はその姿をありありと現わしているようであるが、小説は格別、今後の舞台の上に幽霊の姿をあらわす事はむずかしい。それが怪談劇であれば、猶更その姿を明らさまに見せることを避けて、一種の鬼気とか妖気とか云うものだけを感じさせた方が、観客の恐怖心を誘い出す上に於いて有効であるらしい。

これは演劇ばかりでなく、怪談全般に就いて云うべきことであるが、わが国在来の怪談はあまりに辻褄が合い過ぎる。たとえば甲が乙を殺したが為に、甲又は甲の眷族が乙の幽霊に悩まされると云ったような類で、勿論それには因果応報の理も示されているのであろうが、余りにその因果の関係が明瞭であるために、却って凄味を削減される憾みがある。しょせん怪談というものは理窟の判らないところに凄味もあり、興味もあるのではあるまいか。と云って、その理窟のわからない怪談を、舞台の上で凄く見せることは一層の難題であるに相違ない。今の流行詞(はやりことば)でいえば怪談劇はトテモむずかしい。

（昭和三十一年二月、青蛙房刊『綺堂劇談』所収「甲字楼夜話」より）

青空文庫情報

底本：「伝奇ノ匣2　岡本綺堂妖術伝奇集」学研M文庫、学習研究社
　　2002（平成14）年3月29日初版発行
底本の親本：「綺堂劇談　甲字楼夜話」青蛙房
　　1956（昭和31）年2月
※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。
入力：川山隆
校正：門田裕志
2008年9月23日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

怪談劇

岡本綺堂

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　https://aohelp.club/
BiliBili　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/